

初めてのインド訪問を終えて

アジア経済交流センター長 鎌田 慶昭

仕事柄、私は海外への渡航回数が多い方だと思う。海外駐在の期間は延べ 21 年にわたり、会社生活全体のほぼ半分を占めていた。しかし、これまでに訪問した国々はせいぜい 20 か国程度で、さほど多くない。インドは訪問していない国の一つであり、以前から強い関心を持っていた。商社勤務時代、繊維貿易の仕事でインド人バイヤーと接する機会が多かったことが主たる理由だと思う。彼等の多くは、うんざりするほど理屈っぽく、交渉はとてもタフだったが、ひとたび仕事を離れるとフレンドリーで親切、また義理を重んじるといった印象を持った。最近、事業の海外展開の舞台として、インドに対する関心や期待が再び高まっており、当センターでも一昨年、元 JETRO チェンナイの貿易・投資アドバイザーにご登壇いただき、「黄金時代を迎えるインド経済の最新動向と投資環境について」というテーマでセミナーを開催した。このような背景の中、2024 年 12 月に新田知事を団長とするインド経済訪問団に参加させていただき、初めてインドの地を踏むことができたことは、望外の喜びであった。

本稿では、初めてのインド訪問を振り返り、印象に残った点や感想を記してみたい。

① TN(タミル・ナドゥ)州工業省との面会

TN 州工業省次官による歓迎の挨拶、山本県議会議長による返礼の挨拶と新田知事の紹介が行われ、その後、新田知事とラジャ工業大臣によるプレゼンテーションと意見交換が行われた。

ラジャ工業大臣スピーチ要旨は以下の通り。

- ・ TN 州は日本人滞在者がインドで最も多く、日本企業や自治体の来訪も多い。
- ・ 同州と日本とは文化面でも共通点が多く、お互いに尊敬し合っており、協業の機会は多いと考える。日本では神奈川、大阪、高知、愛媛と友好関係を持っており、大阪には TN 州のデスクを置いている。
- ・ 医薬関連の人材や医師も多く、富山県とは製薬分野でのコラボを希望する。
- ・ 自動車は全国の 40% が TN 州で製造されており、エレクトロニクス分野でも輸出の 30% を占める。富山県と共に研究を進め、独自の製品の製造、開発なども共にできれば良い。
- ・ 日本は人材不足と聞くと、TN 州には優秀な人材が揃っており、日本語を含むニーズに応じた教育を施して日本に供給することができる。

- ・ TN 州では航空機産業もブームになっている。富山県のアルミ産業と接点を持てるのではないかな？



新田知事とラジャ工業大臣の記念品交換

所感

日系製造業が多く、モノづくりの拠点と言われる TN 州には、日本人に近いメンタリティーを持った人達が多く、日本の歴史や文化に対するリスペクトも高いと感じた。

勿論、他の州をまだ知らないのですが、早まったこととは言えないが、インド人は IT 志向が強く地道なモノづくりには不向きという先入観は、少なくとも同州では全く当てはまらないと思う。

②AP(アンドラ・プラデシュ)州 スリシティ工業団地訪問

知事団（団長：新田知事）と分かれ、経済団（団長：麦野経済同友会代表幹事）はチェンナイ中心部から北に約 90Km、バスで 2 時間足らずに位置するスリシティ工業団地（AP 州）を訪問した。

スリシティのシバシャンカー上級副社長によるプレゼンテーションの要旨は以下の通り。

- ・当工業団地は 2008 年に建設され、現在は 9,000 エーカー（約 3,600Ha）の敷地を有しており、更に拡張が計画されている。

下記の通り区域が分けられている。

* 各種工業地帯

DTZ：国内一般関税区域

SEZ：経済特区

TFWZ：自由貿易倉庫区域

EMC：エレクトロニクス製造セクター

* ライフスタイル・ゾーン

日本人向けサービスアパートメントあり

* レジャーゾーン

ドライビングレンジ（未完成）



ジオラマで工業団地の全容を説明する
バシャンカー上級副社長

- ・（進出準備のための）インキュベーション・センターや、レディメイドの工場もあり、パワープラント、排水処理施設も完備されている。
- ・近くに 4 つの国際港があり、2 時間圏内に 2 つの空港がある。
- ・30 カ国 220 社（工場建設中 50 社を含む）が入居、うち日系企業は 30 社。海外企業が入居する場合、21 営業日で認可が下りる。

- ・半径 10Km 圏内に 200 万人の労働力がある。（その内、工科大学卒 10 万人、職業訓練校卒 2.5 万人）
- ・現在、同団地内には 6 万人の従業員がおり、5 年後には 30 万人に増える見込みである。
- ・日本と連携し、日本風の街づくりやビジネスパークの建設を進めたい。業種は多岐にわたるが、特に食品加工、アパレルなどを誘致したい。

所感

スリシティ工業団地内の TFWZ（自由貿易倉庫区域）という制度に注目した。

これは、現地に拠点を持たない外国企業が自社の商品（原料、部品などの生産財）を指定区域内に自己名義で保税保管できるというもので、これは海外販路開拓を望む国外ベンダーにも、現地の工場における調達の短サイクル化（＝在庫負担の軽減）にも益する制度である。

しかし、インド国内に工場を持つある日系製造業の方にお訊ねしたところ、まだこの制度は十分に機能していないという返答だった。

これは他の新興国でもありがちなことだが、折角の制度が現場では十分に活用されていない典型例となってしまう。

③現地企業訪問

Aisan Auto Parts India（愛三工業株） 訪問&工場見学

愛三工業株は愛知県大府市に本社を置く自動車部品メーカーであり、スリシティの他、インド北部のラジャスタン州にも同規模の製造工場を持つ。

坂上社長、富田工場長によるプレゼンテーションの要旨は以下の通り。

- ・インド進出は 2001 年で燃料噴射装置の製造が主だった。
- ・当工場は週休 2 日ではなく稼働日が年間 297 日である。
- ・愛三工業株はトヨタ自動車株の資本 30% で、主要製品は燃料ポンプモジュール、スロットルボディ、EGR バルブ等である。

- ・当社は殆どの部品をローカルで調達しており、輸入は殆ど無い（工場見学時の社長の説明）

DENSO INDIA PVT 訪問

DENSO INDIA PVT は、ニューデリー郊外ウッタル・プラデーシュ州に工場を置く、主に自動車部品メーカーである。同工場は、（一財）海外産業人材育成協会（AOTS）が運営する日本式ものづくり学校（JIM）の拠点として日本式モノづくりを学ぶ場にもなっている。

a.DENSO INDIA PVT 森田社長による会社紹介

- ・同社グローバルネットワーク（拠点数、従業員数）は下記の通り
日本 57 社 76,935 人、欧州 36 社 14,178 人、北米 23 社 24,480 人、アジア 72 社 43,590 人
その他 5 社 2,846 人、海外売上比率 60%
インド国内は、生産工場 x 7、R&D 拠点 x 2
- ・将来の目標として更なる品質の向上とゼロエミッション、カーボンニュートラルの実現を掲げている。



DENSO INDIA PVT 外観

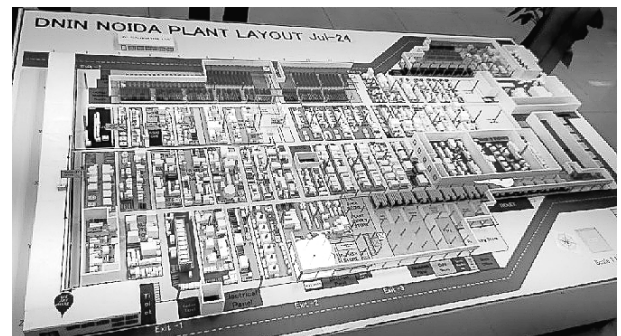
b.（一財）海外産業人材育成協会（AOTS）ニューデリー事務所 手島所長による事業紹介

主に開発途上国の産業人材を対象とした研修および専門家派遣等の技術協力を推進する人材育成機関である。開発途上国の人材を対象とした日本への受入研修（技術研修、管理研修）や、交流を通して、日本と海外諸国相互の経済発展に貢献するとともに、友好関係の増進に寄与している。

c. 工場見学

各部署の説明は、そこで作業をするインド人スタッフ達が英語で行った。皆、元気があり、責任感とやる気、バイタリティーがみなぎっている。

ゼロエミッションを目指すだけのことはあり、工場内の随所で様々な工夫をこらした廃物利用が実行されている。玄関にある工場のジオラマ（写真）も、スタッフ達が使用済みの発砲スチロールを使い、自らの手で作成したものだという。



玄関に展示されている工場のジオラマ

所感

インドは IT 大国であり、また数多くの IT 人材がインドから世界に羽ばたいて活躍していることは周知の事実である。反面、インドの製造業はまだまだ基盤が弱く、アッセンブリーは出来ても原料や中間材は輸入に頼らざるを得ないという認識があった。

しかし、愛三工業(株)の国内調達率の高さ、DENSO INDIA PVT の製造現場におけるインド人管理職の働きぶりなどから、インドの製造業は将来有望であり、IT 業界だけでなく製造業でも優秀な人材は着実に育っているという印象を受けた。

余録&雑感

a. チェンナイの街並み

南部チェンナイ市の蒸し暑い気候、街中の匂いや雰囲気、車やバイクがひしめき合う道路など、私が住み慣れていたインドネシアとやや似ている。三輪タクシー（リキシャ）が並んで客待ちをしている光景も、ジャカルタでよく見かけたもので、どこか懐かしいような感覚を持った。



客待ちをするリキシャの列（チェンナイ）

b. 宗教について

インドの宗教は、ヒンズー教 79.8%、イスラム教 14.2%、キリスト教 2.3%、シーク教 1.7%、仏教は僅か 0.7% だという説明を受けた。

仏教はインド発祥なのに何故マイナーなのか？という質問に対する答えとして、仏教はヒンズー教の分派であり、ヒンズー教の一部なのだというガイドからの説明だったが、少し違うようだ。ヒンズー教も仏教も、母体はバラモン教であり、お釈迦様も元々はバラモン教だったらしい。因みに、以前多くの日本人が抱いていた典型的なインド人像「ターバン+あごひげ」は主としてシーク教の信者であり、僅か 1.7% という超マイナーな存在だった。

c. 機内でトライしたベジー（Veggie）料理

インドにはベジタリアンやビーガンの人が多い。懇親会などで気付いたのだが、宗教上の制約の有無に関わらずアルコール類を飲む人が殆どいない。

Air India 国内線の機内食は Veggie と Non-Veggie の 2 種類がある。試しに Veggie を頼んだところ、写真のような食事が出てきた。大豆ミートのハンバーグのような感じだったが、スパイスが良く利いており、なかなか美味だった。



ベジーの機内食

d. インドの牛たち

チェンナイでもニューデリーでも、いたるところに牛がいる。郊外だけでなく、街の中心に近い場所でもそのそばを歩いている牛たちを頻繁に見かける。大部分が飼牛だそうだが、街中で食料をあさっている（日本のカラスのように）牛たちの中には、外食中 (!?) の飼牛もいるかも知れないが、野良牛も相当数いるようだ。ネットではインド全土で 500 万頭を超えるとの報道もある。



インド国内で見かける牛たち

e. インド製ジムニーの日本上陸

東アジアや ASEAN での製造は日本への持ち帰りが主だったが、インドは距離が遠いので、そのようなスキームには不向きであり、地場消費が周辺国への輸出が主体となる、というのが従来の常識だった。ところが、インド製のスズキジムニーノマド 5 ドアが日本で発売されることが最近報道され、驚いている。新たなビジネスモデルがどのように展開されるのか、期待を持って注目していきたい。

f. 空港内の太陽神スーリヤの像

帰りのインディラ・ガンジー空港のターミナルで、ひときわ目立つ像に遭遇した。インドの神話で、太陽を神格化したスーリヤという神だということだが、存在感が凄い。流石、神々への崇拝の強い国だ、との印象を持った。



太陽神スーリヤの像

結び

かなり以前から「インドブーム」は何度かあった。「インド展」も日本で数多く開催されてきた。

しかし、市場として考えた場合、「時期尚早である」という言葉で進出が見送られるケースが多かった。

モディ政権が誕生した 2014 年以降、インドへの注目度が以前より増しており、コロナ時期には一時低迷したものの、2020 年の V 字回復以降 7% 前後の成長を続けている。政治的にもどちら側にも媚びない独自の立ち位置をとり、グローバルサウスのリーダーとしての存在感を高めている。

インドは多様性に満ちた国ということで、私が今回見聞したことはほんの一部に過ぎないと思うが、それでも強く印象づけられたのは、インド国民の元気の良さ、好奇心の強さ、積極性である。日本は、ものづくりに関して技術、技能、管理手法、人材教育などの面で多大な貢献をしてきたが、今は彼等から学ばなければならない点も少なくないと思う。道路の逆走（頻繁に見られる）を許すほどの大らかさは極端にしても、今の日本はあまり

にも寛容さが無さすぎるのではないかという気がするし、他人に対して気軽に声をかけることが殆どなくなってしまったのも寂しい限りである。

今回、知事本団は AP 州政府との交流と MOU 再締結、インド政府投資促進局との交流、観光説明会等々数多くの成果を上げた。私も経済団の一員として参加させていただき、今後、インドとの交流や交易促進に尽力していきたい。

確かに市場として見た場合、インドは未成熟な部分を残しているが、これから発展が加速すると思われ、今後のインドから目が離せない。今から出来る事、投資でなくても、販路開拓や人材交流（特にインドの IT 人材は必要なのではないか？）、或いは友達づくりなどの草の根交流でも良いので、インドに向かい一歩近づいてみる必要がある。「時期尚早」と思っているうちに遅れてしまうことが何よりも心配である。